

J. S. ミルの成長理論と 国際調和への発展的プロセス（中）

— 人生の相対的価値規準と絶対的価値規準に依拠して —

前 原 正 美

Ⅲ 人生の絶対的価値規準

[1] 人生の絶対的価値規準の発見は、想いの発見＝自己の発見に依存する

ミルによれば⁽¹⁾、人の人生においてもっとも重要なことは、自己の発見である。

人間は、自己を発見しないと自分が何者であるかわからないから、自らの想いがどこにあるのか、という心のルーツがわからず、それゆえに自らの心のうちにある究極の理想的人物つまりは自分が心の奥底で真に求めている人物を発見できない。

人間の望みが高まるのは、究極の理想の自分が発見できていないからである。そのかぎり人間は、他者のなかに真の自分を求めて、新しい目標を設定して邁進してゆく。

裏を返せば人の理想がどこまでも高まるのは、自らの心に宿る究極の理想の自分、すなわち良心が照らしだす究極の理想的他者を見いだせず、したがってまたその他者のなかに自身自身の究極の理想的人物を見いだすことができないからなのである。

したがって自己の発見とは、自らの心に宿る究極の理想的人物の発見である。そしてそれは、自らの心に深く宿る想いの発見に他ならない。

人の心には想いがあり、自分の想いが具体的にどこにあるかわかれば、自分の心の根幹を成しているもの、自分の人生を真に突き動かしているものを見つけだして、自分が何者であるのかを識ることができる。

ましてや人間は、自らの想いを発見すれば、自分本来の個性＝潜在的自己能力が飛躍的によみがえってくる。

そうして人は自己を発見するに至ると、自らの想いを自らの仕事を通じてひとつの形にして、世に伝えてゆくようになる。そしてその想いの発見が自らの究極の理想的人物の発見である以上、たれしも人は、自らの想いを発見すると、現実の未完成な自分から究極の理想の自分へと自らを高め、自己完成への道をひたすら突きすすむようになる。

自己発見とは、生命の発見＝想いの発見である。それは、自らの心に宿る想いを発見することである。

したがって想いの発見こそ、生命の発見であり、感動の心の発見であり、自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見である。

一言でいえばそれは、究極の理想の自分の発見であり、したがってまたその意味において、生命の発見である。

たれであれ人は、その意味における自己を発見しさえすれば、自らの想いを世に伝えてゆくために生命のかぎりを尽くし、自らのかぎらない愛を自らの仕事を通じて世に施してゆけるのである。まさにそれは神と心をひとつにした生き方である。

神に与えられた人間の使命は、神の愛を自らの愛によって世に示してゆくことにあるのである。

要するに人は皆、神に与えられた使命を担って世に登場し、それゆえにその使命を果たすために、生命を授けられているのである。そしてその使命の発見のためには、自己を発見しなければならない、つまりは自らの心に宿る想いを発見しなければならないのである。

したがって人の人生において、想いの発見ほど重要なものはない。

しかし一体、人はいかにして自らの想いを発見することができるのであろうか。結論を先取りすればそれは、次のように整理して考えられる。

- ① 第一に、想いとは、もう一人の自分＝良心の発見である。もう一人の自分とは良心であり、良心とは無限の愛の心である。
- ② 第二に、想いとは、究極の理想的自分の発見である。それは、自らの良心＝無限の愛の心の具体像の発見である。
- ③ 第三に、想いとは、神の発見であり、したがって絶対的価値の発見である。人間は自らの良心＝自らの心に宿る無限の愛の心が照らしだす究極の理想的人物のなかに自らの究極の理想的自分の姿を発見するのであり、そしてそれは自らの具体的なかたちの良心＝無限の愛の心の発見に他ならない。それゆえある特定の他者のなかに見いだした究極の理想的自分の発見は、自分自身の心に宿る神の発見であり、つまりは絶対的価値の発見である、といえるのである。

人間が自らの不完全さを意識しえないのは、神の心である良心に従える共感能力がきわめて低いからである。〔しかし逆に人は、良心に従える共感能力がありさえすれば、より完全な自分自身を意識的に創造してゆけるのである〕（〔3〕『功利主義論』471頁）。

人間があやまった行動をとるのは、人の願望が強いからではなく、良心が弱いからである。……自然的なりゆきはその逆である。[すなわち人間は、良心に従って生きることこそが大事であり、良心が照らした究極の理想的人物のなかに究極の理想的自分自身の姿を発見し、人生の自己完成にむかって努力してゆけば、それは正しい行動なのである] ([2]『自由論』283頁)。

人間は、自己と他者との相対的比較という人生の相対的価値規準に従って生きているかぎり、常に自己と他者という人間関係にとらわれて生きてゆかざるをえず、したがってまた社会という世間一般の常識にとらわれて生きてゆかざるをえない。

なるほど人間が社会という枠組みのなかで生きてゆかざるをえないかぎり、たれしも人は、世間が是認した常識を十分にわきまえて生きてゆくことは重要なことである。だがそのかぎり人間は、自らの存在価値を世間という常識のなかにおしとどめ、ついで世間の常識を越えた人生を創造するということはできない。志ある者は、神に与えられた使命を発見し、その使命のために生命を捧げてこそ、世間の常識を打ち破り新たなる時代を担う人物となりえるのである。

人間はどこまでも自らを貫いて生きる気概が必要である。古い時代の既成概念を打破し、自らの生きる時代に照応した新しき概念を創出してゆくためには、世間の常識にとらわれぬ時代の先駆者の登場が望まれるのであり、そのためには自己と他者との相対的比較という人生の相対的価値規準に従った生き方をはるかに乗り越えて、自己と神との比較という人生の絶対的価値規準に従って生きることが大事となる。

人間は善なる存在である神によって創造されたのであり、……神がすべての人間に対してあらかじめ人間一人ひとりにもっともふさわしいあらゆる能力を与えたのは、それらの能力が引きだされて、開花させるためであって、根こそぎにされて消し尽くさせるためではけっしてない。そのゆえに神は、自らが創造した人間が自らの人生に見定めた理想的概念に少しずつでも近づいてゆくたびに、したがってまた人間自身が自らの理解力、行動力、共感能力のいずれをも少しずつでも高めてゆくたびごとに喜ぶのである ([2]『自由論』286頁)。

裏を返せば神と心をひとつにして自らの使命を果たして生きてゆくためには、自らの心に宿る想いをこそ発見しなければならないのである。

それゆえ以下では、想いとは何か、その具体的考察を試みることにする。

[2]—(1) 想いの発見とは、良心の発見である

第一に、想いの発見とは、もう一人の自分である良心の発見である。もう一人の自分とは良心であり、良心とは無限の愛の心である。

自分自身のなかには、二人の自分が存在する。それは、現在ある自分と、将来においてそうありたい自分である。いいかえればそれは、現実の自分と、理想の自分である。

たとえば現在の自分が経済学部の大学生であって、将来、経済学者になりたいという理想を抱いている、とする。そこには大学生である現実の自分自身と、経済学者になりたい理想の自分自身とが同居しているのである。その意味において人間は、自分自身のなかに二人の自分を有している。

このことは、人間は常に理想を求めて生きている、ということの意味する。しかし自分の理想を現実に実現しうるか否かは、現実の自分が理想の自分を創造するために努力しうるか否か、つまり現実の自分が理想の自分に素直に従って行動しうるか否かに依存する。このばあい、現実の自分が理想の自分に素直に従って行動し努力することができれば、やがて現実の自分は理想の自分となることができる。いいかえればこの時、現実の自分と理想の自分とは合致するのである。先の例でいえば、大学生である自分自身が経済学者になるという理想の自分にむかって、あきらめずに努力しさえすれば必ず自分の理想を実現し、経済学者になりうるのである。

しかし逆に現実の自分が理想の自分に素直に従って行動し努力することができなければ、現実の自分は理想の自分を創造することはできないのである。いいかえれば現実の自分と理想の自分は合致しえず、自分の理想は現実のものとなることはない。

いずれにせよ人間自身のなかには、このように現実の自分と理想の自分とが常に同居しているものであり、現実の自分と理想の自分とが合致するためには、すなわち二人の自分がひとつとなるためには、理想の自分に従って自分を貫く以外に道はないのである。

表現をかえれば現実の自分は未熟な自分であり、理想の自分は現実の自分にとって完全なる自分である。したがって人が理想を目指して生きるということは、不完全な自分を完全なる自分自身へと成長させてゆくことに他ならない。

その意味において理想の自分は、現実の自分にとって人生の完全なる価値規準となる。理想の自分が、現実の自分にとって完全なる自分自身であれば、いいかえれば現実の自分が心の底から切実に自分の理想とする自分自身になりたいのであれば、自ら心に抱いた理想の自分自身は、自らの人生における完全なる価値規準となるのであり、そのかぎり人は、どこまでも自らを貫いてその価値規準に従って、完全なる自分自身を創造するために生命のかぎりを尽くすであろう。

人間は皆、自分自身の本性〔良心〕に従わぬことによって、自分自身の従うべき価値規準を持たなくなる。となれば自分自身のあらゆる人間的能力はしぼみ、やせ衰えてしまう。〔逆にいえば人間は、自分自身の無限の愛なる心＝良心に従いさえすれば、鮮やかに潜在的自己能力がよみがえる〕（〔2〕『自由論』285頁）。

このように考えれば、人は自らの理想とする自分自身になるためには、自分の理想とする自分自身が、完全なる自分自身であることが前提とならなければならないのである。

世のなかには、自分の人生に理想を抱きつつも、その理想を実現しえない人たちがいる。それはなぜかといえば、実はそういう人たちは、口先では声高々に自分の理想を唱えているが、内心では自分の理想は叶わない、と密かにおもっているからに他ならない。だから理想の自分に素直に従えない。それゆえ理想が実現しえない。

いいかえればそうした人たちは、真に理想の自分自身を発見しえていないのである。自分の理想が切実なる自分の想いであり、何があっても達成したい理想であれば、たれしも人は自分の理想を途中であきらめたり、投げだしたりしないし、途中でいかなる困難があろうとも何としてもその困難を克服し、最後まであきらめずに努力し続け、遂には自らの理想を実現しうるのである。

したがって現実の自分が理想的な自分を創造するためには、いいかえれば不完全な自分を完全なる自分へと到達せしめるためには、理想的な自分自身＝完全なる自分自身を発見することが前提となるのである。

良心の権威に従えば、人間は皆、いかに不合理なこと、自分にとって有害とおもえることでも克服できるのである。そうして良心は、常に人間の心のなかにあつて良心に従うように働きかけてくるのである（〔3〕『功利主義論』492頁）。

人間自身のなかには、二人の自分が常に同居している。先に述べたように、それは現実の不完全なる自分自身と、完全なる理想的自分自身である。

一般に自分の理想とする完全なる自分自身のことを、良心という。すべての人間のなかに内在する良心は、常に現実の自分自身にとっての完全なる自分自身を映しだす。その意味において良心は、常に現実の自分自身にとっての完全なる姿を映しだす自分自身であり、したがってまた常に現実の自分自身にとっての完全なる自分自身である。

このように考えれば、良心とは、神の無限の愛の心そのものといえる。なぜなら全宇宙における唯一絶対なる完全なる存在は神をおいて他にないからである。すなわち神こそは、絶

対かつ完全なる存在であり、同時にまた無限の愛なる存在あるがゆえに、すべての人間の心のなかであって常に人間一人ひとりの完全なる姿を映しだし、したがってまたすべての人間が自分自身のうちにある理想の自分＝完全なる自分自身を発見し、その完全なる理想的自分自身を創造しうるように導いてゆくのである。

人間の心には、自分の同胞や宇宙の支配者である神によくおもわれたいという希望があり、したがってまた自分の同胞や神に嫌われることを恐れる気持ちが強い。それはまた人間が本来、自らの心のなかに宿している同胞や神に対する共感と愛の心であり、結果の利害打算を超えて神の意思に従って生きるという気持ちであり、つまりは神へのかぎりない愛と畏敬の念なのである（〔3〕『功利主義論』489頁）。

そのかぎり人間は皆、自分自身のうちに常に理想の自分＝完全なる自分自身を内在しているのであり、その自分自身を発見しうれば、神の心である良心、つまり神の無限の愛の心に従って理想的な自分＝完全なる自分自身を創造するために、全力を尽くして生きてゆけるのであり、したがってまた人生の絶対的価値規準に従って、いかえれば自らの良心である無限の愛の心に従って、自らを貫いて生きてゆけるのである。

たれであれ人は、自らのうちに宿る理想の自分＝完全なる自分自身を発見しうれば、不完全なる自分自身を改善し、完全なる自分自身を創造したいとおもうのである。それが人の心に宿る想いというものである。

いかえれば人の想いとは、自らの心に宿る究極の理想的自分自身であり、つまりは完全なる自分自身を現実のものとしたいという切なる人間の自然的感情であり、たれしも人は、その意味での自らの想いを発見しさえすれば、完全なる自分自身への創造を目指して自らの良心に従っていきゆけるのであり、したがってまた現実の自分自身と理想の自分自身とを合致せしめ、自らを貫いて生きてゆけるのである。

〔2〕—(2) 想いの発見とは、究極の理想的自分の発見である

第二に、想いの発見とは、究極の理想的自分の発見である。究極の理想的自分とは、自らの良心＝無限の愛の具体像の発見である。

すべての人間のなかには良心が存在する。良心とは神の心であり、つまりは無限の愛の心そのものである。すべての人間の心のなかに良心＝神の無限の愛の心が内在すればこそ、たれしも人は本来、善なる存在であり、同時にまた最初から完全なる存在なのである。

人間には本来、他人の利益こそ自分の利益であるという感情がある。社会連帯がすすみ社会が健全に成長すれば、たれもが他人の幸福にますます強い個人的関心を事実として抱くようになり、さらにはまたたれもが自分の感情と他人の善をますます同一視し、少なくとも他人の善を自分の善として実際に考えるようになる。そうして人間は皆、本能的に自分は本来、あたりまえに他人に貢献する存在である、と気づくようになる（〔3〕『功利主義論』494頁）。

だが人間は、はじめからそのことに気づくことはできないのである。人間が自分自身を完全なる存在と認識するためには、自らの心のうちに宿る良心＝無限の愛の心を発見しなければならない。そのゆえに生きるとは、人間の本質である無限の愛なる存在へと立ち戻ってゆくプロセスなのである。

人間のうちには、良心である無限の愛の心が宿っている。その意味において神は常に自分自身のうちにあり、たれしも人は、常に神とともに生きているのである。いいかえれば良心とは神の無限の愛の心であるとすれば、良心とは神そのものであって、神は人間一人ひとりが自らの良心である無限の愛の心に目覚めるように常に導いているのである。

人間は社会が定めた道德規準をおかせば、良心に反したという感情があとになって良心の呵責というかたちで姿を現してくる。……その感情こそ、良心の本質である善、すなわち自らの心に宿る神の心なのである（〔3〕『功利主義論』490頁）。

人間の良心である無限の愛の心はすべての人間の心に内在するが、その具体的な姿は人によってそれぞれ異なる。

人間の本質が無限の愛の心であるかぎり、人間は自らの愛に目覚めれば、自らの愛を世に施して生きてゆくことができる。たとえば歌手になった者は自らの愛を歌に託して世に伝えてゆくことができるし、作家になった者は自らの作品を通して自らの愛を世に伝えてゆくことができる。

このように人間は皆、自らの愛を自らの仕事を通じて世に施して生きてゆくことができるのであり、神に与えられた人間の使命は、まさに自らのかぎりない愛を自らの人生を通じて世に施してゆくことにこそあるのである。そしてまた人間の幸福は、人間の本質が無限の愛そのものであるかぎり、自らの愛を世に施して生きてゆくこと以外にはありえないのであり、その意味で人間が幸福になるためには、自らの愛に目覚める以外に方法はないのである。

大多数の人びとは、いまだに自分の幸福を無視されるような状況に置かれている。しかし人心が改まってゆけば、人間一人ひとりのなかに、あらゆる人との一体感〔愛の絆で結ばれた人間関係〕が生まれるのである（〔3〕『功利主義論』494頁）。

それゆえ神は、すべての人間が幸福になるように、人間一人ひとりの心のなかにあって、その一人ひとりの究極の理想的な自分＝完全なる自分自身を他者のなかに映しだしてゆく。いいかえれば人間一人ひとりとは、自らの良心が照らしだす他者のなかに、現実の自分にとっての究極の理想的人物を見いだせば、自らの良心である神の無限の愛の心を発見することができるのである。

要するに人間は、自らの良心＝無限の愛の心が照らしだしたある特定の他者に完全なる共感を示し、つまりはその特定の他者のなかに自分自身の究極の理想的人物を発見し、自己と他者との完全なる一体感を覚えた時、自らの生命を発見し、感動する。したがって想いの発見とは、自らの生命の発見であり、感動の心の発見である。

したがって自己を発見しえた者は、自らの究極の理想的人物になるべく、その理想を目指して生きてゆくようになる。

人間は自らの想いを発見するに至るや、自らの究極の理想像がはっきりと、しかも鮮明にうかびあがり、明確な自覚・認識のもとで、自らの目指すべき理想にむかって生命を賭けて生きてゆく。

たとえば織田信長に自らの想いを発見した者は、これこそまさに自分が人生を賭けて探していた人物である、と心がふるえ、自らの心のうちにある究極の理想的な自分の姿が信長に映しだされ、それによって自らの心に宿る究極の理想的な自分、つまり自らの良心＝無限の愛の心の具体像が明確につかみだせた瞬間、自分の想いが信長にあったことを識り、感動するのである。

そのゆえにこの者は、信長という人物のすべてを知ろうと努力し、信長に関するあらゆる著作を読み、信長がいかにか生きてかを学んでゆく。具体的にいえばすべての文献、映画、テレビドラマなどに眼を通して、信長に関するあらゆる情報をインプットして共通項をとりだし、これだけは疑いがないという事実から信長という人物がいかなる人物であったかをわりだす。

ましてやこの者は、信長に完全なる共感を抱いており、信長と一心同体であるから、信長の立場で、信長が物事をどう考えどうしてその行動をとったかを、一つひとつの行動に対して完全に理解し、共感できる。時間をかけて信長を研究し、思想や行動を明確につかみとって、信長という人物の素晴らしさを識り、逆にまた欠点をも識ってゆく。

さらにいえばこの者は、信長の辿った道を実際に辿ってみる。信長にゆかりのある寺、墓、史跡、故郷を訪ね、自分の眼で信長自身になりきって、信長との人生を重ねてゆく。

そうして信長が使命のために生命を賭けて生き抜いたことに、あらためて感動し、さらに深い共感を示すようになる。

このことは、それだけこの者が信長に近づいたことを意味する。資料を通じて、また実際に自分の足で歩いてみて、自分の五感で、信長の使命の尊さ、素晴らしい生き方を実感し、自らが信長そのものであること、信長と同じ使命を担っていることを自覚・認識してゆく。

しかしそれは、この者が信長の生きた時代にたち戻って信長になる、ということではない。過去という時代に生きた信長の使命を十分に認識し、そして信長の果たした使命を受け継ぎ、自らの生きる時代のなかで信長と同じ使命を果たしてゆくということである。それは信長の想いを新たな時代に生かしてゆくということである。それが信長に感動し、信長と一心同体になりえた者の使命といえる。

神の真理は、歴史のなかで一度や二度、あるいは何度となく忘れ去られてゆくかもしれないが、いく時代かを経るうちに、必ずその神の真理を受け継いで再発見する人びとが登場し、やがてその真理のひとつずつが先人の想いを受け継いで再出現した人びとによって、さらにはまた恵まれた時代状況のなかで迫害を免れて、それ以後のあらゆる抑圧をくつがえすほどの大きな力となりうるような時代が作りあげられてゆく（〔2〕『自由論』248頁）。

このことは同時にまた、人の生命は未来のために使ってゆかねばならない、ということ意味する。

信長は過去の経験を打ち破り、時代に照応しなくなった社会の枠組み、常識をぶち壊し、伝統的な文化のうえに新たな価値観をうえつけ、能力主義で人の生命を生かし、天下統一を成し遂げる、という大事業に自らの使命を見いだした。まさにそれは、新たな時代という未来における調和的社会の実現を目指したということであり、常に未来から逆算して不完全な現実の社会を打破し、その理想に現実を近づけてゆく最善の努力を払った、ということに他ならない。

神の真理が社会に定着するに至るまでには、かなりの長い歴史的な時間とかなりの量の人類の経験がなければならないのである。したがって先人の想いを受け継ぐ後世の人間に望まれることは、ただそのつぎに来る世代の人びとに対し、偉大なる先人たちが過去の既成概念を破壊してきたその権威に再び逆戻りしないようにすることなのである。〔それゆえ先人の想い

を受け継ぐ後世の者は、神の真理に則した価値を世に伝え、つまりは古き時代の価値を破壊して、新たなる価値を創造してゆかなければならないのである〕（〔2〕『自由論』308頁）。

したがって信長の使命は、天下統一によって社会を調和せしめることにあったのであり、信長に想いをよせる者もまた、使命を同じくしつつも信長の想いを自分の生きる時代に生かしてゆくことに自らの使命を見いだすことになる。

このように信長に想いを発見した者は、信長の人生を通じて、自らの使命を発見した者である。この者は、信長と同じく調和的社会を形成する、という使命を担っているのであり、信長の発想を新たなる時代のなかに応用してゆくことになる。

そうしてこの者は、信長という自分にとっての最高度の理想的人物の意識を超えて、社会全体の調和、ひいては全人類の調和のために自らの生命を使用してゆく人間へと成長し、神の無限の愛の心を自らの存在それ自体によって世に示す人間へと成長してゆくのである。

もとより神に与えられた人間の使命とは、人間一人ひとりが自らの生命を使用してゆく、ということである。

しかし重要な問題は、一体、何のために、ということである。

この問題に対する解答は、具体的には三段階のステップで答えられる。

- ① 神に与えられた人間の使命とは、まず第一に、自分のために生命を使用してゆく、ということにある。

人間の知的な卓越性のすべては、積極的な努力の賜物である。何かを成し遂げようとする積極的な気持ちは、そして自分自身のために働き続けるということは、結果的に他者や社会の人びとのために役立つということであり、何か新しいことを試みて成し遂げようとする利己心こそは、自分自身の創造的な才能の生みの親となり、さらにはまた現実的な才能を生みだしてゆくのである（〔4〕『代議政治論』398頁）。

すべての人間に利己心があるかぎり、人間は皆、人生の出発点においては、自分自身のために生命を使用することが自然のなりゆきであり、かつまたそれが人間にとって重要なことなのである。たれであれ人は、自ら定めた人生の目標にむかって利己心を発揮し、努力してゆけば、そのプロセスのなかで自分の個性＝自己能力を高める一方、自らの意識を高め、共感能力を高めてゆく。

そうして他者に対する共感能力が高まれば、自らの良心が照らしだすある特定の他者のなかに自らの究極の理想的人物を発見し、それによって自らの想いを発見する。まさにそれ

は、自らの生命の発見=自己発見であり、その発見によって人は、自らの使命が自らの想いを伝えてゆくことにある、と識るに至るのである。

そしてその発見は、同時にまた自らの良心である無限の愛の心の具体的なイメージの発見である以上、自らの使命を発見しえた者は、自らの良心に従って自らの想いを、したがってまた自らの無限の愛の心を世に伝えてゆこう、という使命を果たしてゆくために生命を使用してゆくのであり、つまりは隣人や社会のために、自らの愛をかぎりなく注いでゆくのである。

- ② したがって第二に、神に与えられた人間の使命とは、世のため人のために、つまりは社会の一般的利益の増進のために、ひいては全人類のために自らの生命を使用してゆく、ということである。

人間の正しい行為の価値規準となるのは、自分ひとりの個人的な幸福ではなく、社会全体の人びとの社会的幸福に寄与するということである（〔3〕『功利主義論』478頁）。

そして神に与えられた自らの使命を発見しえた者は、自らの良心が照らしだした特定の他者のなかに最高度の自分自身を発見しえた者である以上、自分にとって完全なる自分自身を創造することにこそ、人生の価値を見いだすことになる。

- ③ そしてまた神に与えられた使命を発見しえた者は、自分のなかにある究極の理想的な自分自身を発見しえた者である以上、自らの良心=神の無限の愛の心に従うだけの意識の持ち主であるのであり、そのゆえに神の意思に従った生き方を貫くようになり、つまりは神と心をひとつにして生きてゆくようになるのである。

おのれの欲するところを人に施し、おのれを愛するがごとく隣人を愛せよ、というナザレのイエスの黄金律こそが、功利主義道德の最高の理想である（〔3〕『功利主義論』478頁）。

こうして人は、自己と他者との相対的価値規準をはるかに超えて、現在の自分と究極の理想的な自分、不完全な自分と完全なる自分、人間としての自分と無限の愛なる存在としての神、すなわち一言でいえば自己と神との比較という絶対的価値規準に従って、自らを最高度に高める努力を払いながら、神に与えられた使命を果たしてゆくのである。

もとより人間は皆、常に神に与えられた使命を果たしている。なぜなら人間は皆、自分が

この世に存在している以上、何かのために生命を使用しているからである。

しかしすべての人間のうちに良心という無限の愛の心が存在する以上、人間は皆、自らの良心が照らした特定の他者のなかに究極の理想的な自分自身を発見し、自らの想いを発見して、その想いを、つまりは自らの感動の心を自らの仕事を通じて世に伝えてゆく、という神に与えられた使命に目覚めてこそ、人間の本質である無限の愛の心をよみがえらせ、したがってまた隣人や人間それ自体を愛する自分自身に目覚めて、最高度の自分自身を創造してゆくことのなかに人間の幸福を見いだすようになるのである。

[2]—(3) 想いの発見とは、神の発見である

第三に、想いの発見とは、神の発見であり、したがってまた絶対的価値の発見である。

たとえば信長に自らの想いを発見した者は、信長と同時代に生きたすべての人物の人生を経験し、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見することができる。いいかえれば信長に感動を見いだした者は、その時代のすべての人物の才能を識ることができ、後世からかれらの人物像を客観的かつ相対的に比較しつつ、かれら一人ひとりの使命を発見することができる。

たとえば信長が光秀に討たれたのはなぜかといえば、それは信長が自らの使命を果たし終えたから神に生命を召された、ということがわかる。

後世から歴史を見ても、武田信玄の三方が原での急死、信長の横死など、人間の英知では理解しがたいことが数多く存在する。

しかし人は使命のために生きているのだと認識すれば、信玄はそこまでの生命であった、と容易に理解できる。信玄の死によって家康の生命は温存され、そのために家康は信長の最大の同盟者として天下統一という大事業に寄与することができた。一言でいえば信玄の使命は、自らの政治力によって拡大した領地を信長に手渡すことにあったのであり、それを成し遂げたがゆえに、神に生命を召されたのである。秀吉もまたしかりである。天下統一後、突然、秀吉の人格が変わったのは、石田三成や徳川家康の生命を世に大きく生かすためだった。とすれば人間は神の意思によって生かされているとしかいえない。

したがって自らの想いを見いだした者は、結局、人間というものは神の意思によって生かされているのだ、という神の認識に到達する。

英雄や殉教者は、自分個人の幸福を超えて社会全体の幸福を人生の価値として重要視し、それゆえにかれらは、常に自発的に個人の幸福を捨てた生活を送らねばならなかった。…歴史上の偉大なる英雄や殉教者たちは、社会的調和の実現のための自己犠牲を一般の人びとに

免れさせたい、と信じたからこそ、時代の犠牲者となったのである。……こうした優れた人びとの自己犠牲は、世界中の全体的な幸福の総量を増加するために十分に役立ったのであり、いつでも個人的な人生の享受を自ら捨てることのできる人びとには大いなる栄光あれ！ ……世の中の仕組みが非常に不完全な状態にあるばあいにかぎっては、たれかが自分の幸福をすべて犠牲にして他者や社会の幸福のために最大の貢献を成さなければならないのである（〔3〕『功利主義論』477頁）。

それゆえ信長に感動しえた者は、人生の絶対的価値視点に到達する。信長とその時代にまつわる人びと、信長の想いを受け継ぐ人物を後世から相対的に比較する時、人間はそれぞれ神に与えられた使命を担って世に登場してきている、と識る。いかえればすべての人びとは、神に与えられた使命を果たすために、この世に生命を授けられたのである。

およそ人間は物事を善悪や好き嫌いで判断する傾向がある。だがこの世に生じるすべての事柄、人間の成しえたすべての事柄は善悪で計りしれず、したがってすべては偶然ではなく必然である。

たとえば家康を好きな人の多くは三成を嫌いであり、三成を好きな人の多くは家康を嫌っている。これは人生の相対的価値規準に従って人物を裁断しているからであるが、しかし家康と三成の人生をより深く辿ってみると、二人とも実に素晴らしい人物であり、ともに使命のために生命を注いでいたことがわかる。事実、二人が対立していたという資料はどこにもないのである。

かれらは信長の想いを受け継ぎ、したがってまた秀吉の残した遺産を批判的かつ積極的に継承しつつ、天下泰平の世を築くために生命を注いだ。そしてそれが関が原の合戦で現出したのである。関が原の合戦は、家康の勝利、三成の敗北で終わったが、それは家康が三成よりも優れた人物だということを意味するものではない。二人とも神に与えられた使命のために生命を燃焼し、自らの愛を世に注いで自分にしか成しえない仕事をした、という点において、ともに見事な人生といえるのである。

こうして信長に感動し自らの想いを信長のなかに見いだした者は、信長と信玄や秀吉、家康、三成といった人物の人生を相対的に比較対照し、素晴らしさも欠点も理解することができるのである。そして同時にまたそうした人生の相対的価値規準をつきつめてゆくと、人は皆、神に与えられた使命を発見し、その使命を果たし終えた時に生命を召されるという神の視点、すなわち人生の絶対的価値規準に到達するのである。

信長という人物に感動し信長に自らの想いを見いだした者は、信長を究極の理想的な人物と考えて、信長のすべてを心に宿し、信長自身になりきろうとする。それによって日本史

上、最も傑出した人物のひとりと心をひとつにして自分自身の意識を最高度に高めてゆく努力を払ってゆくのである。

こうして信長という人物を相対的に比較してゆく時に、人間には神に与えられた使命があり、人間は神によって生かされている存在である、という人生最大の発見をし、神という存在を識るに至る。その時、人は人生の絶対的価値規準を発見するのである。

そうして人は、自らの心に宿る究極の理想的人間像を具体的な人物のなかに発見し、自らの想い、感動の心を発見し、信長をはじめ他の武将と同様に、自分もまた神に与えられた使命を担っていることを発見する。

神に与えられた使命とは、具体的には信長の想いを世に伝えることに他ならないが、それはまた同時に、人間には神に与えられた使命がある、というメッセージを信長の人生を通して世に施してゆく、ということでもある。

したがって信長に感動しえた者は、神に与えられた自らの使命をも発見し、自らの仕事を通じて神に与えられた使命を果たしてゆくことに気づくことになる。

そうして人は、自らの使命に目覚め、自らの信長への想いを世に伝えてゆく時に、信長という自分にとっての最高度の理想的自己に接近してゆく。と同時に、神に生かされた信長という意識を自らのうちに宿しつつ、不完全なる自分自身から完全なる自分自身への形成を目指して、自らを最高度の人格たらしめ、最高度の人物になることを人生の目的として生きてゆくのである。

神の全智全能を信じる者は、最高度の道徳を伝えてゆけ、と自らの良心が感じとったことのもすべてを、神の自らに対する要請と必然的に受けとめ、〔神に与えられた使命を〕最善の努力によって果たしてゆく。([3]『功利主義論』482頁)。

そうして自分自身の心を深く耕し、自らの想いととも、世間や後世の人びとに対する自らの愛を込めて、信長の素晴らしさを伝えてゆく時に、人は神に与えられた使命を果たしてゆく。そして同時に人は、これまでの自分自身を改善し、自分自身の意識をより高く向上せしめ、豊かな自然的感情を培って、すべての人の幸福のために生命を注いでゆくのである。

それゆえに人間は、自らの仕事を通じて知的・道徳的に成長し、神は常に自らのうちにある、という認識に至る。自らの使命に生命を捧げる時、人は心のうちから無限の力、無限の可能性をひきだし、自分本来の個性＝潜在的自己能力を泉のごとく湧きあがらせ、自分の作品を通じて自らの愛を世に提示し、自分でもおもわぬほどの素晴らしい仕事を成し遂げてゆく。

ましてや世に感動を与えるという使命を果たしてゆこうとする時、人は自分自身を最高度の人格たらしめねばならず、自分と同等に他者を愛し、ひとりでも多くの人が自分と同様に感動の人生を歩み、ひいては神の無限の愛に目覚めるように全力を尽くしてゆく。

その自覚がなければ人は、神に与えられた使命を果たしてはゆけまい。

世に感動を与えるには、自らの才能が傑出していなければならない。才能が傑出しているから人は驚くのである。才能＝自分本来の個性＝潜在的自己能力をよみがえらせてゆくには、私心を超えて世のため人のため、ひいてはすべての人の幸福のために自らの愛を深く培ってゆかねばならない。世間や未来に対する深い愛を提示することなくして、世に感動を与えることはできない。

したがってその自覚がある者は、ひたすら自らの想いを世に伝えるという使命を果たすために、高い人格と深い愛を培うことを自らに課してしてゆくのである。

人間の本質は無限の愛であり、人間は皆、本来、自らの心のうちにかぎりない愛を宿している。だがその愛が、具体的な形で現出するのは、自らの心のうちにある究極の理想的な自分自身が共感しうる他者を発見しえた時なのである。

人間は究極の理想的な自分自身をあるひとりの特定の他者のなかに見いだせば、その他者に深い共感を示し、その他者こそが究極の理想的人物の具体的な姿である、と認識し、他者のなかから自らの無限の愛の具体的な姿を発見する。そのゆえに自分が何者であるかを発見し、その他者を最高度の人物であると認識し、常にその他者と自分とを相対的に比較して自己向上してゆく。そのプロセスのなかでその特定の他者とその時代を生きた人びと、そしてその時代そのものをつぶさに経験し、ついには人生の絶対的価値視点を培い、自らの心のうちに神の無限の愛の心がある、と認識するに至る。

したがって自己を発見しえた者は、究極の理想的人物を発見すると同時に、神を発見する。そうして人は自らの想い、つまりはその人物の人生を世に伝えるという神に与えられた使命を果たすとともに、常に神との対話を通じて自らを完全なる姿へと近づけてゆくという生命賭けの努力を成し、神に与えられた使命のために生命を注いでゆくのである。

公共心に目覚めた人間は〔感動の心を発見し神に与えられた使命を発見した人間は〕、社会的利益と社会的共感という、社会を動かすためにもっとも強力な二つの動機に突き動かされて、世に感動を示すように、つまり他者の感情に対して自分の力のおよぶかぎり、また他者の感動を呼び起こすように、自分の力のおよぶかぎりを奮い立たせて生きてゆくのである（〔3〕『功利主義論』494頁）。

IV 神の法則

[1] 神が定めた人生の一般法則

神は、人間一人ひとりに与えた使命から逆算して、人それぞれの人生を与えている。

結論を先取りしていえば神は、人間一人ひとりが三段階のプロセスを経て、自らの使命を発見しうるように導いている（図2を参照）。

具体的にはそれは、まず第一に、人が自らの利己心を発揮してゆくプロセスであり、そして第二に、自らの想いを自らの仕事を通じて世に広く高く伝えてゆくプロセスであり、いいかえればそれは、自らの感動の心を自己表現してゆくプロセスであり、さらにはまた第三に、自らのかぎりない愛を自らの存在それ自体において世に伝えてゆくプロセスである¹²⁾。

したがってまず第一に、神の定めた法則は「利己心の法則」、いいかえれば「人生の成功法則」として作用してゆく。

[1]-(1) 利己心の法則=人生の成功法則

人生の出発点において、神の法則は、まず利己心の法則として作用する。人生の出発点とは、20歳前後までの人生のプロセスを示す。

利己心の法則とは、人間は人生の目標を常にひとつに絞り、その目標にむかって全力で努力してゆけば、必ず自分の望みは実現してゆく、という人生の成功法則である。

人間の利己心とは、社会的法=社会的正義の範囲内では是認される人間の欲望であり、自己の境遇改善・地位向上を目指す人間の向上心である。

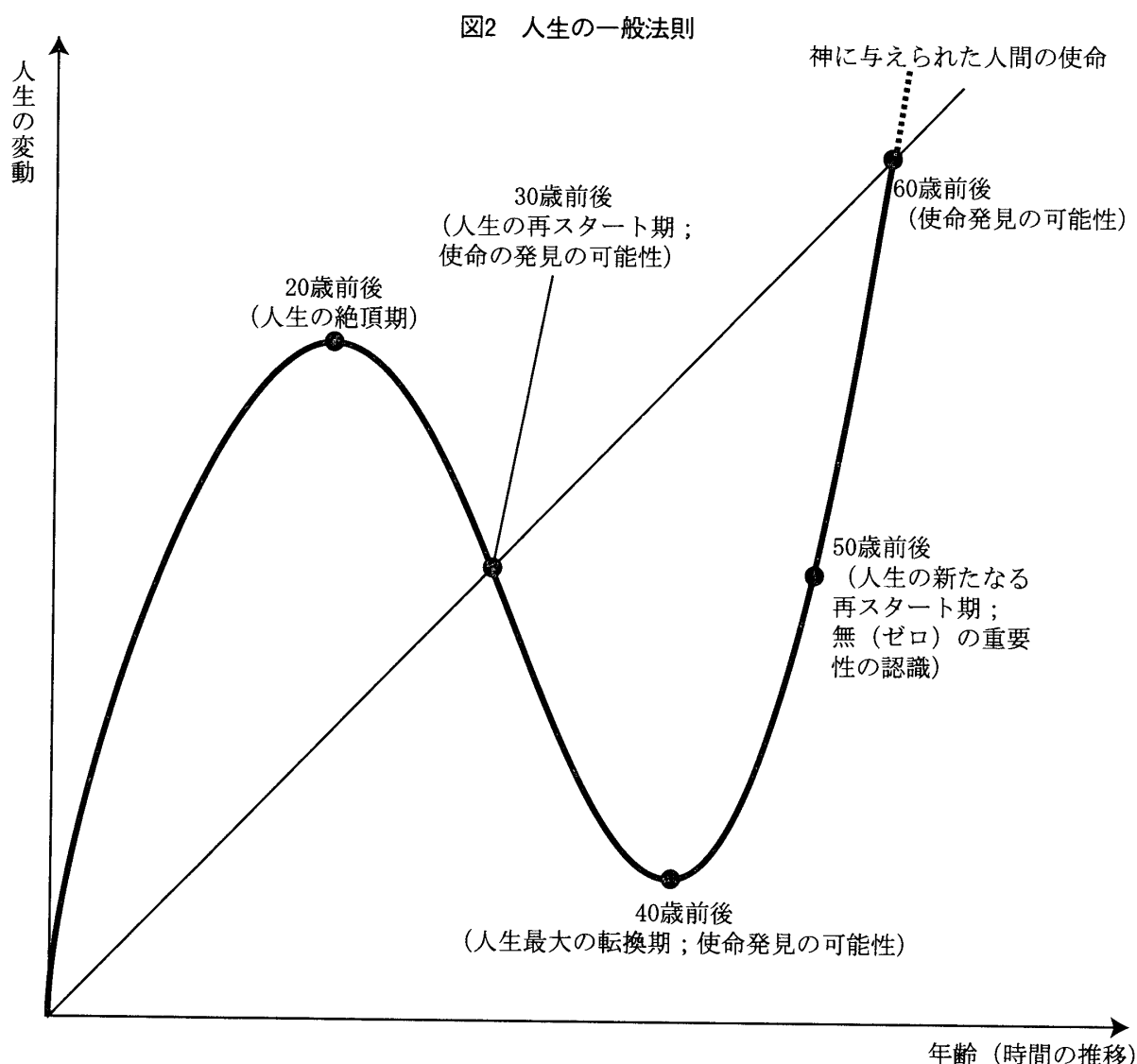
神は、人生の出発点においては、人の望みをつぎつぎと叶えてゆく。

それはなぜかといえ、人は人生の目標にむかって利己心を自由に発揮し、最善の努力を払ってゆくプロセスのなかで、自らの意識と共感能力を著しく高め、ある特定の他者のなかに自らの想いを発見し、したがってまた自己の発見=自分自身の生命の発見に辿り着いて、自らの心に宿る感動を自己表現し、したがってまた自らの愛を世に広く高く伝えてゆく神に与えられた使命を果してゆくために、生命を捧げてゆけるようになるからである。

一言でいえば人は、利己心を発揮してゆくプロセスのなかで必ず神に与えられた使命を発見し、自らの生命を社会のために役立ててゆきたいという心、すなわち公共心をよみがえらせるのである。

したがって公共心の育成のためには、利己心の発揮が前提となるのである。

人間の生命は、はじめから天下万民のものである。いいかえれば人間は皆、はじめから社会的存在なのである。それはまた人間が自分ひとりの力ではけっして生きてゆけず、人は人



- * 縦軸は、人の人生の変動、一般的にいえば人生の山と谷（人生の浮き沈み）を表示する。
- * 横軸は、年齢（時間の推移）に伴う人間の意識の向上＝人間の知的・道徳的水準の向上と神に与えられた使命を発見するに至るプロセスを表示する。
- * 右肩上がりの直線は、神に与えられた使命の道を表示する。人間は最初から神に与えられた使命の道を辿っているが、感動の心を発見し、その使命を発見する可能性は30歳前後から10年に一度訪れる。
- * 人の人生は20年でひと区切りであるようにおもわれる。最初のおよそ20年前後は、人生の目標に向かって利己心を自由に発揮し、自ら望む成功を手に入れる。それは、自分のために生きる人生のプロセスである。つぎの20年前後の期間は、社会の一般的な利益の増大、つまり世のため人のために生きる人生のプロセスである。具体的には30歳前後で試練を経験し、自らの使命を発見する可能性が与えられる。そこで使命を発見すれば、右肩上がりの直線上、つまり神に与えられた使命の道を自らの意識と自覚とを持って突きすすむようになる。しかしそこで使命に気づかないと、40歳前後で人生最大の試練を与えられて、ようやく自らの使命を発見するに至る。その意味で40歳前後は人生最大の転換期となる。しかしそこで使命を発見できないと、50歳前後の年齢の時、30歳前後の年齢の時と同様、すべてが無（ゼロ）になるような経験を与えられ、そして60歳前後で自らの使命をようやく発見しうる可能性が与えられる。40歳前後から60歳前後までの20年間は、使命を発見する最後の機会ともなりかねない。60歳以上の年齢の人生のプロセスについても、およそ同じような経路で20年周期で人生の展開が変わるものと推察される。
- * 尚、以上は、すべて仮説である。

によって生かされている，ということの意味する。

それゆえに人は，社会の一般的利益の増大，つまりは社会全体の幸福の実現のために自らの生命を使用しなくてはじめて，一人前の人間といえるのであり，社会的存在になれた，といえるのである。

だがそのためには人は，何よりもまず自分自身のために生きなければならない。自分自身のことを考えられない人間が社会のことを考えられるはずがないからである。

そこに利己心の重要性があるのである。

それゆえ神は，人の人生の出発点においては，人それぞれの利己心を満たし，そしてその利己心が公共心に結実するように導いてゆくのである。

したがって人の望みが自分の予想以上に早く満たされてゆくのは，当然のなりゆきなのである。

要するに神は，人が自ら定めた目標にむかって利己心を発揮してゆく時，その望みをありのままに受け入れ，その望みが容易に実現するように，はじめからあらゆる配慮を成しているのである。

その理由は，以下の通りである。

- ① 神は人間の能力を引きだす。なぜなら神は，人間の生命を社会に貢献させたいからである。人間の能力は，人が世に貢献しようとおもっているがいがいが，事実として世のためになり，社会に貢献している。人間は自分のために生きているとおもっていても，人間の能力は常に社会のために役立っている。
- ② 神は人の望みを叶え，人に生きる喜びを与える。望みが叶えば，人は自分自身の生きる喜びを増すからである。
- ③ 神は人間の望みを予想以上に早く実現させ，人間に努力の大切さを教える。なぜなら人間はいくら努力しても，自分の望みが叶わないとなれば，努力しなくなるからである。

そのために神は，人間に対してあらゆる配慮を成している。すなわち神は，人間一人ひとりにもっともふさわしい環境を与え，そして出逢いを与えてゆく。そうした事実によって神は，人間が容易に自らの望みを見つけ，目標を見定めるように導いてゆく。

こうして人生の出発点において，神は人間の望みを容易に実現させる。

したがって神の導きによって，人間の望みは，自分の予想以上に早く叶うのは当然である。人間の幸福とは，人生の出発点においては，自分の望む自分になること，自分のなりたいたい自分になることであるが，それは一般に20代前後に実現し，人は自らの望みを達成する。

いかえれば人が自らの理想とする人生の目標にむかって努力している時，人は自分の生命を自分の望みを達成するために，つまりは自分自身のために使用しているのであり，その

意味で神に与えられた使命を果たしているのである。

だからこそ神は、自ら定めた人生の目標にむかって利己心を存分に発揮する者に対しては、その望みを叶え、したがってまた人間の利己心を満たし、つまりは人間を幸福へと導いてゆくのである。

以下、神の配慮について具体的に考えてみよう。

1 神は環境を与え、利己心を引きだす

神はまず、人間一人ひとりにもっともふさわしい環境を与え、利己心を引きだしてゆく。

人間の利己心は人によって異なる。たとえば金持ちになるために利己心を発揮する者、有名になるために利己心を発揮する者、というように人間の利己心は人によって異なる。それは個性が異なるからだ。したがっていいかえれば、神は人間の個性を引きだしてゆく。

人間の個性とは、いわば一本の樹木であり、個性の発揮は内的力である無限の力を引きだし、自分自身の生命力を高め、あらゆる可能性にむかって自己の成長と自己の発展とに結実してゆく起動力となる（〔2〕『自由論』283頁）。

人間の個性とは、たとえば足が速いとか、歌がうまいとか、勉強が好きだとか、といった人それぞれの能力である。

それゆえ個性とは、一言でいえば自己能力である。

人間の個性＝自己能力は人生の目標があればこそ、著しい発展を遂げ、高まってゆく。そしてまた人間は、個性＝自己能力の発揮に伴って自らの存在価値を高めてゆく。

人間にとって、自己と他者とを区別するものは、何よりもまず、個性＝自己能力であり、個性＝自己能力こそ、自己を存在せしめる価値である。

このことは人が自分を自分たらしめるには、個性＝自己能力を高め、自らの存在価値を世に示す以外にはない、ということの意味する。

人間一人ひとは、自分自身の個性の発展に伴って、自分自身の生命をますます貴重なものとし、そうして自分自身の存在価値を高めることによって、自分自身を社会にとっても貴重なものとすることができる。その結果、自分自身の心のうちに高い生命力がよみがえり、それによって人間一人ひとりの生命力が高まってゆくと、人間によって構成されている社会全体にも高い生命力がみなぎってゆくのである（〔2〕『自由論』287論）。

それゆえ神は、何よりもまず、自らの個性＝自己能力を発見しうるような環境のなかに人間を配置する。

たとえば医者としての個性＝自己能力を持つ者でも、医者の家に生まれる者と貧しい家に生まれる者とがある。前者は、親の後継者として医者になり、また後者は経済的に貧しい境遇を乗り越えて医者になって貧しい人のために尽くす、という人生を辿るようになる。

神は、そうして人によっては一見、個性＝自己能力と逆の環境を与えて、かえって自らの個性＝自己能力が浮きたつようにする。たとえばそれは、砂漠のなかにまかれた金のようなものである。

いずれにせよ神は、そうしてもっともふさわしい環境のなかに人間を配置して、人間一人ひとりがおのずと自らの個性＝自己能力を発見しうるように配慮しているのだ。

そのために人は、自らの個性＝自己能力を容易に発見し、それに対応した人生の目標をつくりだしてゆく。

だが実をいえば重要な問題は、そこから先にある。

親のあとを継いで医者になるにせよ、その目標を実現するには、上級の学校に進学し、そのための条件を満たしてゆかなければならない。

要するに人間は、神の配慮があるにせよ、自らの力によって自らの人生をつくりあげてゆかなければならないのである。

だがそうしたばあいにも、神はあらかじめ人間に対する配慮をなしている。

たとえばそれは、母親が民謡好きであるとか歌自体が好きだとか、といった配慮である。となれば当然、母の影響を受けて歌が好きになり、歌手になりたい、という目標が生まれる。

あるいはそうした個性＝自己能力の発見、つまり人生の目標の発見の機会は、必ず自分をとり囲む環境のなかに用意されている。

たとえば親戚のなかに歌が好きな人がいるとか、近所に歌手になるようにすすめる者がいるとか、学校の先生が歌の能力を見抜いてくれる、とかいった具合にである。

例をあげればきりがないが、いずれにせよたれしも人は、神の配慮によって自らの環境のなかから個性＝自己能力に見あった人生の目標を発見してゆく機会に恵まれてゆくのである。

いかえれば神は、人間一人ひとりの生まれ育つ環境、つまり両親をはじめとして自分の育つ環境、たとえば親戚、友人、知人などをあらかじめ定めているのである。

こうして人間の利己心は、自分に与えられた環境によって生みだされる。

人間は、自分の生きる時代、自分の生命を授かる家や両親、兄弟姉妹、ひいては友人、知

人といった人間関係を選んで世に登場してはいる。

とはいえ自分を取り巻く環境のすべては、神の意思によって決められている。神は、すべての人間が自らの利己心をかきたてるように、人間一人ひとりにふさわしい環境を与えている。

それは当然、すべての人間が幸福になるためである。

たとえば神は、経済的に貧しい環境を与えた者に対しては、必ず貧しい環境を改善しうるだけの能力、すなわち自己の境遇を改善してゆく利己心を与えている。

貧しい家庭環境というような物質的な状況でさえ神は、そうした境遇に人生を与えた人びとの最大の知的・社会的な成功への道を切り拓いて、物質的な成功の〔たとえば金持ちになるというような〕条件を準備している。それゆえ人間は、自己の境遇を抜け出そうというエネルギーさえあれば、そのエネルギーを十分に発揮し外的な自己の環境を改善させてゆくだけでなく、人間としての内的な性格の完成に近づいてゆくのである（〔4〕『代議政治論』402頁）。

だから人間は、自分の置かれた環境のなかで育まれた利己心に従えば、たとえば経営者になろう、あるいは事業家になろう、という明確な願望が生まれ、おのずと人生の目標がつくりだされてゆくのである。

人生の目標がはっきりと定まれば、人のすすむべき道は明らかとなる。

そうして神は、人間一人ひとりを導き、ひとつの際立った個性＝自己能力を持つ者を世に押しだしてゆく。

神にすれば、それは当然のことである。なぜならば人間とは生命であり、人間の生命とは、ひとえに自分本来の個性＝潜在的自己能力だからである。

人の生きる目的は、その意味での生命を発見し、神に与えられた使命を果たしてゆくことにあるが、そのためには自分の個性＝自己能力の発見こそが前提となるのである。

ゆえに人は、何よりもまず自分の個性＝自己能力を発見してゆかなければならない。

そのためには、人間一人ひとりの持続的な努力こそが重要である。

人間の努力は常に人生の目標を必要とする。自分の人生に目標がなければ、人はけっして努力できない。

人間の幸福は、何よりもまず自分の望む自分になることである。なぜなら人間は、自分の望む人間になることにより、自分を識る喜び、自分を創造する喜びをその人生のなかに見だし、自分を信じる心、自分を愛する心を培ってゆくからだ。

自分を信じる者は、神を信じる者となる。なぜなら自分を信じる者は、信念の持ち主であり、人の一念は必ず自らの無限の力、無限の可能性を引きだしてゆくから、神は常に人間の心のなかにある、とやがては気づくことになるからだ。

自分を愛する者は、他者を愛する者となる。なぜなら人間の愛は、常に他者の存在を必要とするからだ。

自分と同等に他者を愛する者は、必ず神の無限の愛に感謝するようになる。

そのために神は、人間一人ひとりにふさわしい環境を与え、たれもが旺盛な利己心を発揮し、自分の人生に大きな望みを持って生きてゆけるように配慮している。

だから人間が自分の利己心を自由に発揮し、自分の定めた人生の目標にむかって努力してゆく時、自分の望みが叶ってゆくのは、当然のことなのである。

2 神は出逢いを定め、利己心を引きだす

神はまた、あらかじめ人間一人ひとりの出逢いを定め、利己心を引きだしてゆく。

〔人間が愛にめぐり逢えれば〕自分の辿った人生をふり返ってみて、社会には不必要なものは何ひとつなく、自分が定められた社会のなかに生まれてきたこと自体、自分にとってははじめから神の意思で決められたことだったのだ、と考えるようになる。そうした神の必然に気がつく時、明らかに自分と他者との出逢いのすべては、社会全体の利益のために考慮された結果であった、という人間関係の上に成り立っているということがわかるようになる（〔3〕『功利主義論』493頁）。

もとより人間は、自分ひとりの存在だけでは、自分の個性＝自己能力を発見できない。その発見は、他者の存在があつて、はじめて実現可能となる。

① だが自分の個性＝自己能力を発見するための他者は、たれであってもよい、というわけではない。いかえれば自分の個性＝自己能力を発見しうる他者は、特定の他者でなければならぬ。

このことは、とりもなおさず人の生まれる環境が決定づけられている、ということの意味している。

たとえばある人が、歴史作家になろう、という目標を抱いたとする。

このばあい自分は、ある特定の歴史作家という他者（たとえば司馬遼太郎）のなかに自らの理想的人物像を抱いたのであり、つまりはその他者に共感しえたのである。

自分にとってその他者は、歴史作家であれば、たれでもよいというわけではけっしてな

く、自分の良心が照らしだした他者（たとえば司馬遼太郎）でなければならず、自分の心が理想を抱き、共感しうる他者、その意味での特定の他者でなければならないのである。

② さらにいえば自分にとって、その特定の他者とめぐり逢うためには、さまざまな条件を前提とするのである。

たとえば父親がその歴史作家の作品の愛読者であるとか、あるいはまた友人、もしくは知人、先生がその作家のファンであるとか、というように自分とその特定の他者である歴史作家とめぐり逢うための、いわゆる媒介者との出逢いが前提となる。

③ さらにまたその特定の歴史作家の作品のなかに、自分の究極の理想的人物を発見しうるだけの教養、一言でいえば知性や、豊かな感情があらかじめ備わっていなければならない。

それゆえ神はそうした知性や感情を育むために必要な学校へ進学させるように導いてゆくのである。

④ かつて加えて、その特定の歴史作家とめぐり逢うためには、出逢うべき時期という条件も必要である。

たとえば自分とその特定の他者との出逢いは、中学時代の共感能力では不十分であり、高校時代の共感能力であれば十分だとすれば、神はその特定の時期にその作家の作品に出逢うように配慮するのである。

その他、自分の個性＝自己能力の発見、つまり人生の目標の発見の機会＝条件をあげればきりが無いが、いずれにせよ神は、絶好のタイミングでその作品に人がめぐり逢うように、あらかじめ配慮しているのである。

⑤ あるいはまたこの例のばあい、もとより自分に歴史作家になる、という個性＝自己能力がある、ということをも語る。

自分が特定の他者に共感した、ということはその他者のなかに自らの個性＝自己能力を見いだした、ということであり、自分自身のなかに歴史作家になりうるだけの個性＝自己能力がなければ、歴史作家という特定の他者に共感したりはしないであろう。

それゆえ自分がある特定の他者に共感する時、自分は他者のなかに自らの個性＝自己能力を見いだした、ということの意味するのであり、同時にまたこのことは、あらかじめ自分に歴史作家としての個性＝自己能力が備わっている、ということの意味するのである。

そもそも人間は、無から有を生み出すことはできないのであり、人生とは自分のなかにあるもの、いかえれば自分のなかに内在する無限の可能性を引きだしてゆくプロセスである、といえるのである。

だがいかに自分のなかに無限の可能性があるとはいえ、その可能性は自己と数多くの見知

らぬ他者との相対的比較によって、はじめて発見されうるのであり、それゆえ自らを自己の発見に導くある特定の他者との出逢いは、人の人生において決定的に重要なことである。

それゆえにこそ神は、人生の出発点においては、何よりもまず人間一人ひとりが自らの個性＝自己能力を発見しうるような他者との出逢いを与えてゆくのである。

要するに神は、歴史作家としての使命を定めた者には、自己の発見に結びつくある特定のひとりの歴史作家（あるいはその作品）と出逢うように、すべての環境を配慮しているのであり、したがって人が自らの理想の他者と出逢うのは、偶然などではなく、神の慈愛の心による必然といえるのである。

3 神は目標を与え、人間の自己能力を引きだす

人生の出発点においては、人の望みは自分の予想外に早く実現する。人によっては、自分の望み以上の立場を与えられることもある。

その神の意図は、以下のように整理される。

① 神の意図は、人間の心に宿る自己本来の個性＝潜在的自己能力を引きだすことにある。

いかえれば神は、人間の心に宿る想いを発見させ、自己を発見させ、使命に目覚めさせてゆくのである。

自分本来の個性＝潜在的自己能力を引きだすには、まず個性＝自己能力を生かしてゆくことが重要となる。なぜなら人間の個性＝自己能力は、自分本来の個性＝潜在的自己能力へと発展してゆくからである。人間の個性＝自己能力の発展は、自分本来の個性＝潜在的自己能力を引きだす。そうして自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し、自らの生命を発見して感動し、神に与えられた使命を発見すれば、人間は利己心を越えて公共心に満ちた生き方ができるようになる。

人間は本来、天才として世に登場しているが、神に与えられた使命を発見しさえすれば、たれでも天才になりえるのであり、自分本来のあるべき姿に立ち戻ってゆけるのである。

それゆえ神はまず、人間一人ひとりの個性＝自己能力を引きだすために人生の目標を発見させてゆくような環境と出逢いを与えてゆくのである。

人間は目標をひとつに定めれば、自分自身の個性＝自己能力を発展させてゆくことができる。そしてたとえ生命を自分のために使おうと、自ら定めた人生の目標にむかって努力する者は、神の眼からすれば社会のために生命を使用しているのである。

② 神は人の望みを叶えることで、世に不可能はない、ということ、ゆえに人は、いついかなるばあいにも自分の人生に希望を持って生きてゆかなければならない、ということ、そしてそのために積極的に努力してゆくことが何よりも大事である、ということを教えてゆ

く。

人間は、いくら努力しても自分の望みが叶わないとなれば、努力しなくなる。となれば人間は、生きる望みを失い、自分を信じ自分を愛する心を失ってゆく。自分の心が自分からはなれてしまうことは、人間の心が神の心からはなれてしまうことだ。

常に人間を愛し、人間を幸福に導こうとする神は、そういう理不尽なことはけっしてしない。というよりむしろ神は常に完全であるから、神のやることに矛盾はなく、神は常に人間の生命を世に生かしてゆく。

そのために人の望みは、人生の出発点においては、簡単に叶ってゆく。

その結果、人の生活環境は著しく改善され、社会的な地位・名誉も高まって、かつての自分とは比較にならないほど生活水準の向上を果たしてゆく。貧しかった者は豊かになり、経営者になりたかった者は経営者になり、歌手になりたかった者は歌手となって、それぞれに活躍してゆく。むろんそれは、人間自身にすれば、自己努力による結果であり、自己改善による結果である。

自己の境遇改善、地位向上、生活水準の向上のためには、つまり人が自らの利己心を満たしてゆくためには、自分自身を変えてゆかねばならず、その自己改善こそが人間の努力というものである。

いずれにせよ神は、こうして人間に積極的努力の重要性を教える。

③ 神は、自らの成功を信じる者には自分の望みどおりの活躍の場を与えてゆく。人間は自らの望みが叶えば、自分自身の生きる喜びが増す。それゆえ神は、人間一人ひとりが自らの利己心を存分に発揮できるような活躍の場を与え、さらにはまた人の望みを叶えて、人に生きる喜びを与える。

自分の成功を信じる者は、ひとまず定めた自分の目標を決してあきらめずにやり遂げる気概がある。

人の目標を実現させてゆく力は、何があってもやり遂げる、というエネルギーである。

旺盛なエネルギーを持つ者は、利己心のあふれる者だ。たれしも人は、地位・名誉を得たい、立身出世したい、という利己心が旺盛であるほど、生きる力がみなぎり、自分の成功を信じ、いかなる試練をも克服して、ついには自分の望みを叶えてゆけるのだ。

人生の目標は、自分の人生に託する人の望みによって生みだされる。

人の望みは、人間の利己心から湧きあがる。金持ちになりたい、有名になりたい、立身出世を遂げたい、その動機が何であれ、利己心が旺盛であれば、人それぞれの自然的感情に応じて生きる喜びが見つかり、その喜びがあればこそ、人の人生は輝きを示し、将来への展望が拓けてゆく。

人の望みは、頭をひねって絞りだすものではなく、人間一人ひとりの利己心から泉が湧きたつように、おのずと湧きあがってくるものであろう。

自分の望む目標に到達し、自分の望む結果を手に入れた者は皆、旺盛な利己心の持ち主であり、つまりは積極的な努力を払い、自分の個性＝自己能力を発見し、そこに磨きをかけてきた者に他ならない。

ゆえに人間の利己心は、人を動かす最初の起動力となる。

人間を本当に突き動かす起動力は、その人自身の主観的感情であり、正確に主観的感情の強さに比例するのである（〔3〕『功利主義論』491頁）。

神は、利己心あふれる者に活躍の場を与え、生きる喜びを与える。それによって人間は自らの人生にさらなる望みを湧きあがらせてゆくようになるのである。

しかるに神は、たとえば歴史作家になって自らの成功を望む者には、ベストセラー作家となって自らの作品が映画化されてゆく、というように活躍の場を与えて、人の個性＝自己能力を鍛えあげ、さらにはそれが自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見へと結実してゆくように導いてゆく。

④ さらに神は、強烈な個性の持ち主、つまりは旺盛な利己心の持ち主を社会の眼に触れる立場と地位に置いて、人間一人ひとりに個性の重要性を示してゆくのだ。こうして神は、社会に対して成功者としての人間の見本を示す。

個性のある人間は自己能力が高い。むしろ人間は、自分の存在自体が個性であるが、しかし一般に多くの人びとは、自分の個性＝自己能力を発見できずにいる。

だから神は、自らの個性＝自己能力を十分に発揮し、自らの望みを叶えた人間を数多く世に示し、人間一人ひとりに対し、人間とは個性＝自己能力である、と言葉を用いずに示すのだ。

ゆえに人は、自らの置かれた環境のなかで、ある特定の他者のなかに自分の個性＝自己能力を発見し、その特定の他者のなかに自らの理想的人物を見いだせば、たれでも人生の目標を見定めることができる。

神は、こうして人間に目標を発見させ、その目標にむかって積極的に努力してゆくプロセスのなかで、自らの個性＝自己能力を発展させ、自分本来の個性＝潜在的自己能力を引きだしてゆく。

4 神の意思と人間の意思を重ねる

神は使命から逆算して、人間一人ひとりにもっともふさわしい環境を与え、出逢いを与え、人生の出発点においては人が自らの望みを発見し、利己心を自由に発揮してゆくように導いてゆく。

しかし神が人生の目標に辿り着く条件を与えても、人間が自分自身でそれに気づかなければ、神の人間への愛も徒労に終わる。

人間自身の視点からすれば、人生は自らの意思で築きあげてゆかなければならない。自らに与えられた環境や出逢いを大切にして、自分の置かれている状況のなかから自らの人生の目標を見だし、その目標にむかって努力し望みを達成しようとする者は、人間の意思と神の意思とが合致している者である。

裏を返せば自らの望みを達成するために自らの意思で毎日を懸命に生きている人間は、人間の生命を世に役立てたい、という神の意思と合致する者である。人間が自らの使命を発見してゆくためには、自らの望みを達成するプロセスのなかで神の意思に自らの意思を重ねあわせて、自らの人生は自らの努力によって作りあげてゆく、という気概が必要である。その意味で、人の人生は自らの心がつくりだす、といえよう。

人の人生で明白に真実であることは、人間の生活環境の改善は、ただ自分自身の意思によって積極的に永続的になされてゆかなければならない、ということである（〔4〕『代議政治論』396頁）。

たとえば自分の人生に望みを抱きつつも、何らかの困難に直面してあきらめてしまうならば、人生はそれ以上の進展をけっしてみない。だが反対に、何があってもやり遂げる、と自らの信念を貫いて努力を重ねる者は、いかなる困難も乗り越えてゆく。神が無限の愛であるかぎり、神は常に人間の望みを叶える。しかし人間が自ら望みをあきらめてしまえば、いかに神といえども、どうしようもない。なぜなら神は、人間の自由意思を尊重しているからである。しかし逆に自らの信念を貫く者は、自ら信念意思を貫き通し、つまりは自らの意思を無意識のうちにも神の意思に重ねあわせている。だから自らの信念を貫く者は、神の意思と自らの意思を重ねているのである。

そのように考えれば人間にとってもっとも重要なことは、自分自身を信じ続けること、つまり自分の信念を貫いて努力し続けること、といえよう。

したがって留意すべきことは、あらかじめ神は、人間一人ひとりの環境を用意しているにせよ、その環境のなかから自らの人生の目標を特定の他者への共感によって見つけだし、そしてまたその目標を達成してゆくのは自分自身である、ということである。

いかに神が自分に他者とは異なる個性＝自己能力を与え、さらにはそれを引き出す環境を用意しているにせよ、自分がそのことに気づかなければ、せつかくの神の配慮も、つまりは神の自分に対するかぎりない愛も、水の泡と消え失せてしまうであろう。

すべてのことを神に任せるということは、すべてのことを政府に任せきってしまうということと同じことであり、つまりはすべてのことに関して何も考えず、自分自身の不平不満の結果を自然の災害として受けとるのと同じことである（〔4〕『代議政治論』389頁）。

その意味でたれしも人は、自らの人生は自らの意思によって、そしてまた自らの努力によってつくりあげてゆかなければならないのである。

〔神が与えた〕動機が人間をつくり出すのではなく、人間自身が動機をつくり出すのである（〔4〕『代議政治論』448頁）。

さて自らの人生の目標を見いだした者は、その目標にむかって利己心を自由に発揮し、自らの個性＝自己能力を鍛えあげてゆく。

その結果、共感能力は高まる。なぜなら人は、自らの仕事を通じて、知的・道徳的に成長し、豊かな自然的感情を培い、あるいはまたさまざまな人びととの出逢いを通じて、さまざまな他者の人生の経験をなしてゆくからである。

他者の人生の経験とは、ひとつには自分とは異なる他者の意見や感情を経験することである。

たとえば自分が他者と仕事において対立した時、あるいは仕事上で失敗した時、自分は他者との意見や感情の相違を識る。

そうした他者とのかかわりを通じて他者の意見や感性を経験することで、他者を受け入れる心、つまりは共感能力を高めてゆくのである。

そうして共感能力が高まれば、人生の目標はさらに高まってゆく。そしてその高い目標を実現してゆくためにさらに利己心を旺盛に発揮し、したがってまたそのために最善の努力を払ってゆく。その結果、自分の個性＝自己能力はさらに高まってゆく。なぜならば自分の個性＝自己能力の向上なしに、人生の目標を実現することはできないからである。

その一方では人は、自分の仕事を通じて自然的感情を豊かに培い、自らの意識を高めて共感能力をさらに著しく高めてゆく。その結果、これまでの自分が共感しえなかった他者に共感しうるようになり、自らの意識を著しく高め、自らの器量をさらに大きく培って、新たな

自分自身を創造してゆくのである。

そうして人は、自分の仕事を通じて知的・道徳的水準を高め、共感能力を増してゆけば、これまで自分が共感できなかった他者の意見や感情についてゆき、したがってまたこれまでの自分にはない新たな発想や意見や感情や考え方それ自体を身につけ、自分の個性＝自己能力を著しく高め、自分自身のうちにある無限の可能性を引きだしてゆくのである。

他人の経験を自分自身の方法で活用し解釈することは、自分自身の能力が成熟に達した人間の特権であり、人間が成長するための正当な条件である（〔2〕『自由論』281頁）。

そうして人は、自らの人生の目標を高めてゆくたびに自らの意識を高め、自らの共感能力を高めて、ついには自らの良心が照らしだす究極の理想的人物のなかに自らの想いを発見し、したがってまた神に与えられた自らの使命を発見し、自らの良心に照らしあわせて生きてゆくという人生、つまりは神の無限の愛の心という絶対的価値規準に従って究極の理想的自分自身を創造するという人生の目的にむかって、全力を尽くして生きてゆけるようになるのである。

逆説的に考えれば神がすべての人間に対して使命なるものを与えて世に登場させている以上、人の生きる目的は神に与えられた使命を果たすこと以外にはない。

なるほど人間一人ひとりには、最初から自らの使命を識っているわけではない。

しかし神は、人間一人ひとりが自らの使命を自らの力で発見しうるように、自分にとってもっとも適切な場所に人間を配置し、さらにはまた自分が出逢わなければならない他者との出逢いを導いてゆくのである。それゆえ人間にとって大事なることは、自分がいま与えられている環境のなかで常に目標を持って全力で生きてゆく、ということであり、さらにはまた人間には神に与えられた使命があるということそれ自体をあらかじめ識っておく、ということである。

もとより人生とは、自分が識りえた知識を現実の生活のなかで経験してゆくプロセスということができる。いかえれば人間は、自分が識りえた知識しか経験してゆくことができないのである。とすれば人間には、それぞれ神に与えられた使命がある、という知識をあらかじめ身につけていけば、自ら定めた人生の目標にむかって努力してゆくプロセスのなかで、必ずその使命を発見することができるのである。その意味でたれしも人は、ただたんに神の意思によって自らの生命を生かされてゆくだけでなく、自分自身の意思によって神に与えられた使命を探し求め、したがってまた他者に対する観察力を高め、自己と多数の見知らぬ他者との心を比較し、そうした絶え間ない努力による自己と他者との相対的比較を通じて、自

分自身の想いを発見してゆく努力を続けてゆかなければならないのである。

このように考えれば人間にとってもっとも大切なことのひとつは、「^し知^しることを識^しる、と^しいうことを識^しる」ということである。

たとえば自分の想いが、石田三成にあったとする。いかえれば神は、自分自身に対して石田三成という人物に、自分自身の究極の理想的人物を映しだそう、と決めていたとする。だが神が、そのために必要不可欠な環境や出逢いを与えていたにせよ、自分自身が人間の意識としてそれに気づくことができなければ、あるいはまた石田三成という人物自身を知っていなければ（つまり石田三成という存在を知らずその知識がなければ）、いかに神の意思が作用したにせよ、自らの想いを発見することはできず、したがってまた神に与えられた使命を発見することはできないのである。

そのゆえにたれしも人は、常に自分に与えられた環境や出逢いを大切にし、そしてその神の与え給うた必然的事実を謙虚に受け入れて、常に新たな知識を身につけ、そしてまたその知識を自分の人生に生かしつつ、新たな自分を創造してゆかねばならないのである。

具体的にいえば人は、人生におけるひとつの明確な目標を10代のうちに見つければ、20歳前後にはその目標を現実の実現し、自らの望みを叶えることができるのである。

いうまでもなくそれは、以上で指摘したように、神の人間一人ひとりに対するあらゆる配慮のお陰なのである。

裏を返せば人は、10代のうちに人生の明確な目標を発見し、自らの望みを叶えようと利己心を存分に発揮してゆきさえすれば、神のあらゆる配慮によって20歳前後には必ず自分の望む自分、自分のなりたい自分を実現し、自らの利己心を満たしてゆけるのである。

そうして人は、ひとつの望みが叶うと、さらに新たな望みを見だし、つまりは自らの目標を高めて旺盛な利己心を発揮し、その努力のプロセスのなかで自らの意識と共感能力を高め、およそ10年の年月を費やして自らの良心が照らしだす究極の理想的人物があるひとりの特定の他者のなかに見だし、自らの想いを発見して自己の発見＝生命の発見に辿り着き、したがってまた自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見して感動の心呼び覚まし、神に与えられた使命を果たすために、自らの愛を社会全体の調和のために、ひいては全人類の調和のために生命を注いでゆくようになるのである。

したがって人間は皆、自らの利己心を自由に発揮してゆくプロセスのなかで、自らの感動の心を発見し、その感動を自らの仕事を通じて世に伝えてゆくという、公共心に目覚めるのである。

そうして人は、30歳前後の時期において神に与えられた使命を発見し、その使命を果たしてゆくために生命のかぎり注いでゆく人生をつくりだしてゆくのである。

[1]-(2) 公共心の法例=感動の心の法則

しかし人間の望みが叶うやいなや、第二に、神の定めた法則は「公共心の法則」、いいかえれば「感動の心の法則」として作用する。それは、自らの想いを自らの仕事を通じて世に広く高く伝えてゆくプロセスであり、自らの感動の心を自己表現してゆくプロセスである。

人間は、鏡なしには自分の顔かたちでさえも見るこのできない存在である。

要するに人間は、自分の存在自体を容易に識ることのできない存在なのである。つまり人間は、自分が一体、何のために世に登場してきたのかを、自分ひとりでは発見できないのである。

そこで神は、人生の出発点、つまり20歳前後までに人の望みを次つぎに叶えてゆく。そのゆえに人の望みは叶い、人の生活環境は著しく改善され、社会的な地位や名誉も高まって、かつての自分とは比較にならないほど生活水準の向上を果たしてゆく。

人の望みが自らのおもいのままに叶う時期は、もとより人が目指す職業によって異なるが、一般には20歳前後である。

たとえば医者などのような職業を目指す者は、自分の望みが現実に叶うのは一般の人びとよりもやや遅れて20代半ばから30歳頃までとなる。

神が与えた人間の心には、利己心、公共心、無限の愛の心がある。

それゆえ人間は、利己心→公共心→無限の愛の心という経路で自らの心を深く培ってゆく。

したがって自らの利己心を存分に発揮してゆく者は、神の意思によっておのずと公共心に目覚めるように導かれてゆく。

要するに神は、30歳前後の時期を人の人生のターニングポイント（人生の転換期）と見定めて、人間一人ひとりが利己心を乗り越えて公共心に目覚めるように計らってゆくのである。

しかるに人間が利己心を乗り越えて自らの公共心に目覚めてゆくプロセスは、具体的にはつぎの二つのパターンがある。

1 利己心を発揮してゆくプロセスのなかで、自らの想いを発見し、感動の心と呼び覚まし、公共心に目覚める人生のケース [Aパターン;図3を参照]

人間に利己心があるかぎり、一般に人間は、どこまでも利己心を発揮しようとする。

利己心とは、功名心であり、向上心であり、人の人生を突き動かす起動力であり、エネル

ギーである。

それゆえ利己心の旺盛な者は、自らの望みが叶い、ひとつの人生の目標が達成されると、さらに高い目標を設定し、その目標を実現するために利己心を発揮してゆくのである。

たとえば歌手を目指していた者が、20歳前後で自らの望みが叶って歌手になったとする。そしてヒット曲をだし、活躍の場を広げ、自らの存在価値を高めていったとする。

このことは、人が自らの個性＝自己能力を高めてゆくために、経験の場を広げてゆくということ、自らの世界を広げてゆくということの意味する。

人間は、仕事を通じて自分自身の利益ではなかった他者の利益を考慮してゆくようになり、自分の要求が、相対立する経験を繰り返すことによって自分の偏見を少なくし、社会的にこれまでよりも高い規範によって導かれてゆく。そうして共同の利益のために共同の仕事に従事してゆくことによって隣人が味方となり仲間となってゆくのである・・・（[4]『代議政治論』404－405頁）。

たれしも人は、仕事を通じて自らの個性＝自己能力を鍛えあげ、豊かな自然的感情を培い、知的・道徳的水準を高め、意識を高め、共感能力を高めてゆく。

たとえば歌手として有名となれば、歌手としての仕事にかぎらず、映画やテレビ、あるいは舞台の仕事も与えられてゆく。

それによって多くの経験をし、また多くの人たちとの出逢いにめぐり逢う。

そうしてたとえば、30歳の時、司馬遼太郎の『関ヶ原』という作品に出逢い、石田三成という人物を知り、石田三成のなかに自らの想いを発見し、感動の心呼び覚まし、石田三成とその妻あや子の愛の人生を歌で世に伝えてゆく、という自らの使命を発見したとする。

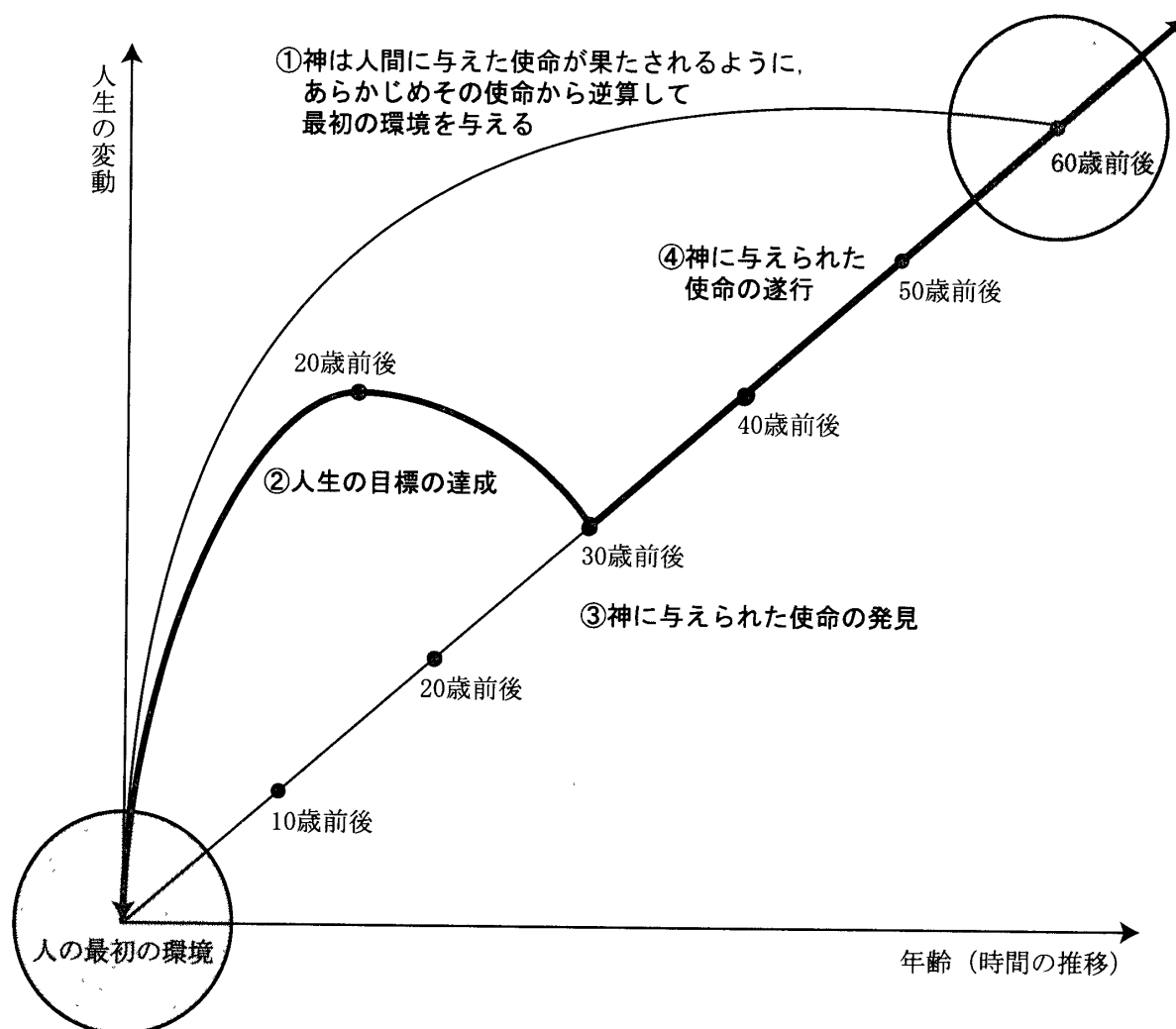
使命を発見すれば、感動を世に伝えてゆく、という意識が生まれる。ゆえに使命を発見した人間は、公共心に目覚め、自らの仕事を通じて自らの愛を広く高く世に伝えるという隣人愛、人間愛の心を培ってゆく。

世の中には自分と同じ使命を担う者がいるが、そうした人びとが自分の存在に気づいて、お互いにおのずと出逢うことになる。そして人は、想いを同じくする者と出逢い、個人愛にめぐり逢うと、隣人愛＝人間愛の心がさらに深まってゆく。

そうして人は、神に与えられた使命の発見によってこそ、個人愛にめぐり逢い、人間愛を深め、自らの愛を広く高く世に伝えてゆくようになる。

2 利己心を発揮してゆくプロセスのなかで、神に与えられた試練を経験し、公共心に目覚

図3 人生の法則〔Aパターン〕



- ① 神は人間一人ひとりに与えた使命から逆算して、それぞれの人間にとってもっともふさわしい環境のもとに人間の生命を授け、そうして人間一人ひとりの生命が世に大きく生かされてゆくように導いている。
- ② そのゆえに人間は、自らの置かれた環境のなかで10代までに自らの人生における明確なひとつの目標を発見し、あきらめずに持続的な努力を払ってゆけば、20歳前後で自らの望みを叶え、その目標を達成できるのである。
- ③ そして自らに与えられた仕事を通じて、したがってまた自らに与えられた新たな環境や他者との出会いを通じて自らの意識を高め、飛躍的に共感能力を高めてゆけば、30歳前後の時期までには神に与えられた使命を発見できる。
- ④ したがってそれ以後の人生は、人生の相対的価値規準を超えて人生の絶対的価値規準に従って、つまりは神の無限の愛の心（良心）に従って生きてゆけるようになる。そうして神に与えられた使命を果たすために、自らの生命を社会の一般的利益の増大に貢献しうるように使用してゆくようになる。そうして人は、自らの愛を広く高く世に施してゆけば、神に大きな試練を与えられることなしに、むしろ神の大きな愛に抱かれて、神に与えられた使命を果たし終えるまで世に生かされてゆく。

める人生のケース [Bパターン;図4を参照]

人間一人ひとりが自らの利己心を自由に発揮してゆくプロセスのなかで、自らの意識と共感能力を高めて、ある特定の他者（たとえば石田三成）のなかに自らの良心が照らした究極の理想的人物を発見し、自らの想いを発見して、その感動の心を世に伝えてゆく使命に目覚めれば、たれしも人は、自らの愛を広く高く世に施してゆく、という仕事に全身全霊を注いで、多くの人びとに感動を与えてゆくことになる。

そしてまた神に与えられた使命のために生きる時、個人愛にめぐり逢い、自分と一心同体の同一人物と心をひとつにして、愛の人生を貫いてゆくのである。

慈愛なる神は、すべての人間が自らの使命を発見しうるように、その人にとってもっともふさわしい環境と出逢いを常に与えている。

それゆえ人は、自分に与えられたすべての出逢いや現実を受け入れてゆかなければならないのである。

人間は、自分の意見に反対する人がいれば、それは他者が自分に何かを教えてくれているのだから、自分を批判する者に対しても感謝し、広く心を開いて反対の意見を持つ者の言うことを受け入れてゆかねばならないのである（〔2〕『自由論』267頁）。

要するに人間は、自分の与えられた環境のなかで常に人生の目標にむかって利己心を発揮し、そしてまた自分に与えられた仕事に常に全力を尽くし、出逢った人びとを大切にしつつ、まじめに誠実に生きていけば、おのずと神に与えられた使命を発見し、自らの愛に目覚めて、その愛を深く培ってゆく人生をつくりあげてゆくことができるのである。

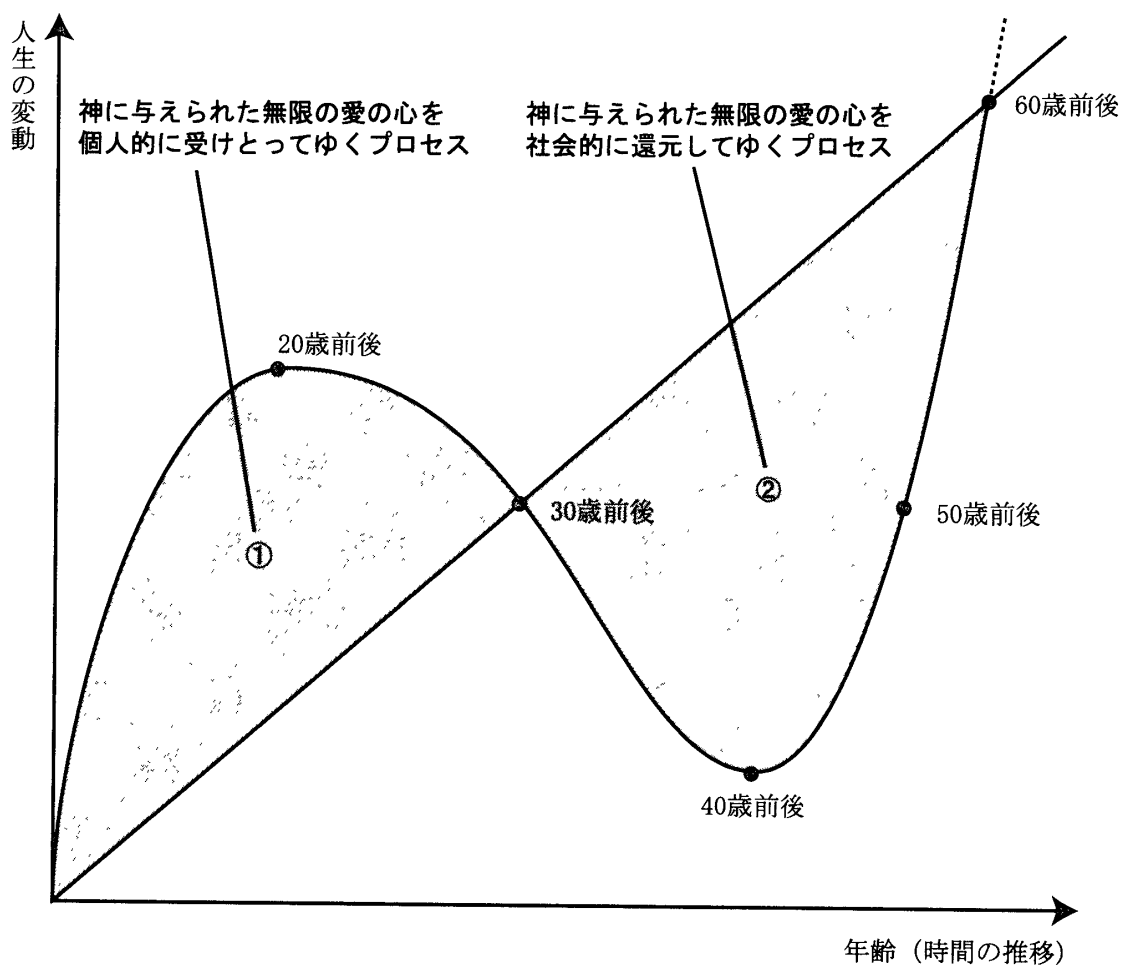
具体的にいえば神は、30歳前後を人生のターニングポイントと見定めている。すなわち神は、自分個人のための生命の使用から社会全体のための生命の使用へと、いいかえれば利己心から公共心に従った生き方へと、人間の意識の転換を図る時期を人の人生の30歳前後に見定めているのである。

しかし自分の利益のためならば、他者を犠牲にし、他者を押しつけ、踏みつけてゆくような人間は、かえって逆に30歳前後をターニングポイントとして神に大きな試練を与えられてゆくことになる。すなわち30歳前後までに人間が自らの使命を発見できないばあい、今度は神は、さまざまな試練を与えてゆく。

一言でいえばそれは、神が人間の望みと反対の結果を与えてゆく、ということである。

たとえば傲慢な経営者は、さらなる利益を目指して資金を投資して事業拡大した途端に不

図4 人生の法則 [Bパターン]



- ① 一般に人間は、30歳前後の時期までは、神の無限の愛の心を与えられるだけ与えられて生かされてゆくため（①の部分は神に与えられた無限の愛の心を個人的に受けとってゆくプロセスを示す）、自ら定めた人生の目標にむかって利己心を自由に発揮しつつ生きていってよい。
- ② しかしそのプロセスのなかで自分に与えられたすべての事実（たとえば環境や仕事場）や他者との出逢いを通じて自らの意識を高め、共感能力を高めることによって、神に与えられた自らの使命を発見できないと、30歳前後の時期をターニングポイントとして神に与えられた試練を経験し、それまで自分に与えられた神の無限の愛の心を使い果たしてゆき（②の部分は神に与えられた無限の愛の心を社会的に還元してゆくプロセスを示す）、ようやく60歳前後で神に与えられた使命を発見するに至るのである。

景気に見まわれ、自分は儲けるとおもったのに投資した巨額の借金だけが残る。

人間にとって、それは苦しみと受けとめられるだろう。

しかし神からすれば、それは人間に対する慈愛である。

およそ人間は、人生が順調に進展しているあいだは、成功の原因を自分の努力の結果である、と考える。だがそのばあい人は、明らかに他者への感謝の心を忘れている。そのために他者に尽くす心、おもいやりの心、いたわりの心を見失ってしまっている。

だから神は、人間の計算と反対の結果を与えて、人の心を深く培ってゆくのだ。

たとえば巨額の負債を担った経営者は、もはや利益の増大ではなく、むしろ負債（マイナス）がないことの素晴らしさを識り、つまりは無（ゼロ）のありがたさを識る。

莫大な借金を抱え、社会的信用を失い、仕事が激減する。取引先も友人も離れ、さらには離婚して家庭までも失う。気がつけば人生の出発点よりも、さらに悲惨な状況になってしまった。金、信用、人間関係すべてにおいて失い、無（ゼロ）以下になってしまった。

このような事態に陥ってしまったとしてもすべては、自分自身の心が招いた結果である。

人間は、他者や社会に対し善を施せば、自分に善が返ってくる。しかし逆に自分が他者を傷つける行為をなせば、自分に何らかの災いが返ってくる（〔3〕『功利主義論』507頁）。

人間は自分の努力の成果を失ってはじめて、これまで支えてくれた家族、仕事を与えてくれた他者の存在のありがたさを識る。

仕事に不平不満を抱き、関係者へ怒りをあらわにし、他人を妬んだり恨んだりすれば、そうした自分の未熟な心は、すべて必ず自分に返ってくる。自分が傲慢で、仕事に対して不平不満をいって仕事を選び、その結果、仕事がなくなるのは当然の帰結であり、自信過剰となれば、巨額の負債という形で自分の心がはね返ってくるのである。

たれしも人は、自分の心が現実のなかにはね返ってきて、はじめて自分を深く反省する。

たとえばまた人は、病気で入院し仕事がまったくできなくなれば、仕事ができていたこと自体、そしてまた自分を心配して見舞ってくれる人があること自体に感謝するだろう。

そうして人間は、生命の尊さを識り、生命さえあればそれだけでありがたいことだ、と考えるようになり、自分に対しても、他者に対しても謙虚な心を持てるようになる。

悲惨で惨めな経験は、こうして人間のものを見る眼を謙虚にする。いままでは高いところから他者やものごとを見下ろしていたが、他者のありがたさを識り、自分を批判してきた者でさえも、素晴らしいとおもえるようになる。このことは、多くの人びとを理解し受け入れられるようになったこと、つまりはものを見る視点が下がったことを意味する。

そうしてすべてを失い、無（ゼロ）以下になったが、しかし生命だけはあり、という事態となって、はじめて人は、生命がある、ということだけでも素晴らしい、と識る。まさにそれは、自分の生命の発見である。

失うものは何もなくなった、と考えれば、たれしも人は自らの人生に対する恐れはなくなり、もう一度やり直そう、自分の生命を世のため人のために役立ててゆこう、という勇気が湧いてくる。

こうして神は、悲惨な経験を人間に与え、人間を無（ゼロ）以下の状況に引き落とすことで、第一に、無（ゼロ）の素晴らしさを識らせ、第二に、人間の心を深く培い自然的感情を育成し、第三に、生命の尊さを発見させ、そうして自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見へと人間を導くのである。

神は人間に大きな試練を与えるのは、神の慈愛ゆえである。

いうまでもなく人の人生においては、自分の心は自分の人生に戻るようになっている。

他者を厳しく批判すれば、自分もまたいずれ厳しく批判されるし、他者を冷たくあしらえば、自分もいずれ冷たくあしらわれる。

その反対に人に喜びを与えれば、めぐりめぐって喜びが自分に与えられるし、人にやさしくすれば、自分も他者にやさしくされる。

いずれにせよ神は、30歳前後までに使命に気づかない者に対しては、大きな試練を与え、そしてまたさまざまな経験を与えて、人の心を深く培い、自らの生命の尊さを考え、傲慢な心に気づかせ、意識の向上を図り、他者への共感能力を高めて、使命の発見へと導いてゆく。

そこに、神の無限の愛があるのである。

すでに述べたように神は、人生の出発点において人間に、少なくとも自分個人の人生においては世に不可能はない、ということ、いついかなるばあいにも自分の人生に希望を持って生きてゆかなければならない、ということ、そして積極的な自己努力こそが重要である、ということなどを教えてゆく。つまり神は、人間一人ひとりが自らの利己心を満たしてゆくためには、自分自身を変えてゆかねばならず、その自己改善こそが人間の努力であることを、あらかじめ人生の出発点において教えてゆくのである。

そして神は、人間が自ら定めた望みが叶うや、つぎに「公共心の法則」＝「感動の心の法則」を適用し、人間の望みとは逆の結果を与えてゆく。それが一般に30歳前後である。

人間は、本来、単純に出来ているから、自分の望みをひとつずつ叶えてゆくにつれ、おのずと人生の目標を高めてゆく。人生の目標が高まれば、当然、困難の度合いは大きくなってゆく。

あるいはまた望みが叶い、地位名誉を手に入れ、世に活躍するようになるや、人は当然それが自分の努力の賜物である、と考えて傲慢になってゆく。

そのゆえに人は、かつてない人生の試練に見舞われる。自分の傲慢な心は、そのまま自分にはね返る。その結果、人は克服できそうもないほどの人生最大の危機に直面し、転落してゆく。

こうして人間は、およそ30歳前後に人生の転機——ターニングポイントを迎え、いままでに得たものを失って無（ゼロ）になるか、あるいは無（ゼロ）以下になる。

たとえば歌手であれば突然、売れなくなったり、経営者であれば急に会社経営が立ちゆかなくなって財産を処分せざるをえなくなったり、またそのために離婚をして家族を失ったりする。

人間は皆、傲慢になれば、少なくとも生涯に一度は、自分の想像を絶する大きな試練に遭遇するようになっている。そしてそれは、自分の傲慢な心によって生みだされた結果である以上、けっして避けられない必然的事実である。

そうして神は、すべての人間に対し、人間の心というものを教えてゆくのである。

要するに神は、人の人生の30歳前後の時期においては、ただ人間が努力を払い、自分の好きなように生きているだけでは、けっして道は拓けない、ということを事実のなかで示してゆくのである。

人間ひとりの力には、すべての事柄に関して厳しい限界がある。人間の力は、自然の力をいくつにも重ねあわせて使用することによってのみ、偉大な力となる……。神の意思は、自然の法則のように作用してゆくのである（〔4〕『代議政治論』361頁）。

およそ人間は、自分の人生が順調に進展している時には、自分の力を過信し、すべての結果を自分の努力の成果であると考えがちである。

しかし人間はそのかぎり、けっして神の存在に気づくことはできない。そして人間はそのかぎり、自分のうちにある無限の力、無限の可能性に気づくことはできないのである。

基本的に人間は、自分ひとりでは自分のうちにある無限の力、無限の可能性に気づくことは、けっしてできないのである。

だから神は、人の望みがある程度叶い、金持ちになった、有名になった、立身出世を遂げた、あるいは家も建てた、車も手に入れた、という段階に到達した時、人間の計算や将来にむけての生活設計を見事に覆してゆく。

そうして神は、人間の狭い経験にもとづく固定概念や既成概念をぶち壊し、傲慢となった

人間に対して大きな試練を与える。神は、そうした結果を与えることで、望みどおりに人生が展開しない原因を人間自身に考えさせるのである。

たとえば貧しい環境に生まれ育った者の例を挙げてみよう。

この貧しき人物は、他者に負けてなるものか、と必死に勉強し、大学にすすみ、経営学を学び、その知識を生かして会社に就職し、そして自分の望みどおりに出世し、地位を得、名誉を得、権力も得た。その会社で妻と出逢い、子をなし、少しは親孝行もできた。自分の個性である経営能力は、社会的にも認められ、顧客がついたため、やがて自立し、経営者となった。人生は順風万帆に進展した。

しかし物的利益は得たが、生命を賭けるに足る人生の価値が見つからないことに疑問を持ちはじめたちょうどその時、突然、景気が悪くなり、会社が傾き、それが人生最大の試練となった。

その試練によってこの者は、なぜ自分が大きな試練に陥ったのかを真剣に考え、そしてすべての原因は、自分の心の持ち方にこそあったのだ、と識ったのだった。そしてまたこの者は、自分に与えられた試練を乗り越える努力によって自分のうちにある無限の可能性を引きだし、世に乗り越えられぬ試練はない、と気づいた。その結果、この者は、何事にも屈せぬ気概こそが自らの心に宿る無限の可能性を呼び覚ます、と識ったのである。

この例を見ればあきらかに人は、神が人間に大きな試練を与える意味は、自らのうちに宿る無限の可能性、無限の力を呼び覚ますということにある、と識ることができるのである。

人生の変転、その他まならぬ社会への失望などは、主としてはなはだしい無知や自制力を失った自分自身の欲望の結果か、あるいは悪政による不完全な社会制度の結果である。したがって自分自身の人生に苦悩があるとすれば、その苦悩のおもな根元はすべて自分自身の配慮と努力とによって大部分——その苦しみはほぼ完全に——克服できるのである（〔3〕『功利主義論』476頁）。

ゆえに人間の欲望は、果てしなく続くわけでは決してない。

人生の出発点においては、人の望みは人生の心の支えであるが、人間は皆、その望みを大きくし、人生の目標を大きくする時、必ず神の与えられた試練に直面し、そこで人間の欲望を克服しうる感動の心を発見し、世のため人のために尽くす公共心を養ってゆくのである。

それでもなお自らの不完全を認めぬ者に対しては、神は容赦なく人間を突きはなし、さらに大きな試練を与えてゆく。

いかなる人間といえども、試練が二重にも三重にも重なれば、助けてくれ、と悲鳴をあ

げ、自らの不完全さを識るであろう。

不完全とは、完全に対する概念であり、自らの不完全さを識る者は、完全さを識る者となるのであり、つまりは神の存在を識る者となるのである。

しかし神は、その者が自分の力で立ち上がる気概を示し、実際に行動に移してゆけば、必ず人間を感動に導いて使命を発見させてくれるのである。

そこには神の無限の愛の心があるのであり、神は人間が自らの愚かさに気づき、自らに与えられた試練を乗り越えるようとする気概を示す時、大いに喜び、人間の生命をこれまで以上に大きく生かしてゆくのである。

注

- (1) 本論文における J. S. ミル『経済学原理』からの引用に関しては、参考文献に掲示した Mill [1] を使用した。たとえば (II p. 217, ②51頁) と表示したものは、左が Collected Works II の 217 ページからの、右が岩波文庫の末永茂喜訳の第二分冊 51 頁からの引用を示している。また Mill [2], [3], [4] からの引用に関しては、() 内に邦訳のページ数を表示した。Mill [1] - [4] までの引用文中の [] 内の文章は、すべて引用者のものである。上記の引用文の邦訳に関しては、引用者が適宜改訳した。
- (2) 人生の一般法則に関する具体的な考察に関しては、今後の研究課題とさせて頂きたい。本節では、本論文で展開した人生の一般法則にしたがって、歴史上の人物（たとえば平清盛、織田信長、武田信玄、豊臣秀吉、石田三成、徳川家康、島津斉彬、西郷隆盛、ソクラテス、イエス・キリストなど）や神に与えられた才能を十分にひきだして活躍して世を去った人物たちの人生を参考資料として、ひとつの仮説を提唱した。なお前原 [5] を参照されたし。

参考文献

- [1] Mill, J. S., Principles of Political Economy, with some of their applications to social philosophy, 7th ed. 1871, in Collected Works of John Stuart Mill, Vol. II-III, Univ. of Toronto Press, London, Routledge & K. Paul, 1965. (末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫, 第1-5分冊, 1959-63年)
- [2] Mill, J. S., On Liberty, 1859, in Collected Works, Vol. XIV, 1977. (早坂忠訳『自由論』中央公論社, 1967年)
- [3] Mill, J. S., Utilitarianism, 1861, in Collected Works, Vol. X, 1969. (伊原吉之助訳『功利主義論』中央公論社, 1967年)
- [4] Mill, J. S., Considerations on Representative Government, 1861, ed. by Harper & Brothers, New York Univ. Press, 1862. (山下重一訳『代議政治論』中央公論社, 1967年)
- [5] 前原正美『J. S. ミルの政治経済学』(白桃書房, 1998年)

{付 記} 本論文は、石田鮎美氏との共同研究の成果である。